



Vol.200 March 2021 SPRING

弘 前 大 学

# 学園だより

特集

卒業・修了・退職にあたって

巻頭言 02 / 特集 卒業・修了・退職にあたって 04 / 研究室紹介 18 / 新任教員紹介 20 / けいじばんコーナー 21 / 編集後記 22



# 多くの 支えがあって 今がある



弘前大学長 福田眞作



新型コロナウイルス感染症の再拡大と数年に一度の寒波襲来によって、例年よりも何倍も厳しかった冬も終わりを告げ、この津軽の地にも待望の春が訪れようとしています。春は、多くの皆さんとお別れの季節でもあります。弘前大学を卒業される学生の皆さんと退職される教職員の皆さんに、心からの感謝を込めて、送別の言葉を述べさせていただきます。

令和2年度末をもって卒業される学生の皆さん、まずは心からのお祝いを申し上げます。ご卒業、誠におめでとうございます。新型コロナウイルス感染症というこれまで人類が経験したことのない世界規模の危機に直面し、本学も教育研究、社会貢献、そして皆さんの大学生活に大きな影響を受けました。新任の学長として、皆さんの最終学年でもあったこの1年間を振り返るとき、感染対策として要請した様々な制約に（おそらく）不満を持ちながらも協力してくれたこと、厳しい状況下でも授業や研究を諦めずに継続し、無事に卒業の日を迎えることができたこと、このことに心からの感謝の気持ちと敬意を表します。ありがとうございました、そして本当に良く頑張りました！

皆さんの大学生活、そして弘前市での暮らしはいかがでしたでしょうか？弘前市は、歴史と伝統があり、高い文化の薫りを備え、物価や家賃が

安く、そして治安の良い学園都市であったと思います。四季折々に催されるイベント（特に祭り）は、きっと皆さんの生活に彩りを与えてくれたことでしょう。そして、授業はもちろんのこと、大学で知り合った友人・先輩・後輩との交流、皆さんの成長をサポートし見守ってくれた教職員との交流、課外活動、（オンライン）海外留学、そしてアルバイトやボランティア活動の中で知り合った地域住民との交流など、地方都市にある弘前大学ならではの学びを通して、皆さんの大学生活が実りあるものであったならと願っています。申し上げるまでもなく、皆さんの学びや挑戦はまだまだ続き、これからが本番、実戦ともいえます。そのことをしっかりと意識して、これからも学び続ける、挑戦し続ける決意をこの機会に新たにしてください。さらに、今回のコロナ禍における皆さんの生活を案じた本学OB・OG、本学教職員、そして地域の皆さんから、ご寄附や食の支援（お米・もち麦、おにぎり、りんごジュース、自治体の地元産品）など、たくさんの温かい支援があったことを、社会人としてあるいは研究者として新たなスタートを切る今、胸に刻んで欲しいと思います。皆さんの保護者に限らず、多くの支えがあって皆さんの今があり、そのことに対する感謝の気持ちをしっかり持つことが、皆さんの「前に進む



力」の源となるはずです。皆さんがこれから経験する社会生活や研究生活では、コロナ禍の影響で例年以上に様々な壁や困難が待ち受けているかもしれません。その壁や困難を乗り越えようと必死に、真剣に努力を続ける皆さんを必ず誰かが見えています、そして必要なときには誰かが手を差し延べてくれるはずです。そのような経験を大事にして、皆さん自身も「誰かを助けられる人」へ成長していくことを願っています。さて、卒業生の7割の方は、活躍の場を県外に求めて、ここ青森県から旅立つこととなります。皆さんが弘前大学の学生として過ごした期間は様々ですが、縁があってこの弘前の地で、そして弘前大学で過ごした年月が、生涯にわたって大切な思い出となることを願ってやみません。

更なる飛躍を目指して、今年度末をもって他大学に異動される教員の皆さん、本学における教育研究の成果が新天地でのお仕事の中で少しでも役に立つことがあればとても幸いに思います。皆さんの教育研究をさらに発展させていただき、実績の一部が本学の評価に繋がることを期待しています。なかには、他の大学等から本学に赴任し、このたび定年退職を迎える先生もおられます。他大学での経験や研究成果を本学にもたらし、教育研究の歩みの一翼を担っていただきましたことに、心から感謝を申し上げます。

本学を去られる事務職員の皆さん、それぞれの勤務期間内で、国立大学の法人化、その後の法人評価への対応、学部改組や新規学部・研究科・研究所の創設、そして産学官連携の推進など、本学を発展させるための様々な業務に携わり、実績を積み上げていただいたものと推察しています。そのような皆さんのお仕事があったからこそ、今日の弘前大学があります。定年を迎えられる皆さんの中には、本学が唯一の職場であった方々もおられます。本学とともに歩んできた長い経歴の中で、さまざまな出来事が皆さんの胸に刻まれていることでしょう。達成感や満足感をもって弘前大学の職員としてのキャリアを終えることができた・・・と皆さんに思っていただけなら、こんな幸いなことはありません。

戦後の混乱期に、旧制弘前高等学校、青森師範学校や青森医学専門学校などが母体となって、1949年に空襲の被害を免れた弘前市に新制大学「弘前大学」が創立され、2019年に本学は開学70周年を迎えました。新型コロナウイルスの感染拡大が起こる前年であったこともあり、盛大

に祝賀行事を挙行することができました。弘前市をはじめとする周辺自治体やその地域の方々のご支援、そして皆さんを含む、全ての先輩学生・先輩教職員が脈々と築き上げてきた弘前大学の歩みを振り返るとともに、次の10年間に本学が取り組むべき課題について皆さんと共に考える良い機会となりました。今後とも選ばれる地方大学であるために本学がなすべきこと、それは教育研究活動を推進し、その成果をしっかりと地域に還元するとともに世界に発信していくことであることに変わりはありません。一方で、国立大学の法人化に伴い、地域貢献と産学官連携が大学の使命の一つとして明確に示されたことにより、本学も地域貢献と産学官連携に資する取組の推進を強く意識するようになりました。そんな中、本学はいち早く青森県の最重要課題である短命県の返上を目指した大規模住民健康調査（岩木健康増進プロジェクト健診）を開始し、この取組は国の革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）拠点の指定を受け、全学部、自治体、住民、企業および全国の研究機関が参画する巨大プロジェクトに発展しています。これまでの実績は、オープンイノベーション創出のロールモデルとなる先導性・独創性の高い事例として、また産学官民が一体となって社会に大きく貢献する事例として評価され、政府系の主要イノベーションアワードにて三冠を達成するという快挙を成し遂げました。他にも、各学部・研究科において地域の強みと特徴を活かした教育研究活動が精力的に進められており、地域とともに青森県発の新産業や雇用の創出にむけた挑戦を続けています。引き続き、「世界に発信し、地域と共に創造する弘前大学」として、ますます活発な教育研究活動と社会貢献に資する活動を展開してまいります。どうか、これからの本学の歩みを温かく見守っていただくとともに、ご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

終わりに、今年度末をもって本学を去られる学生・教職員すべての皆さんに改めて感謝を申し上げますとともに、次のステージでの皆さんのご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。そして、弘前の地を離れる皆さんには、なんらかの機会に再び弘前の地と母校である弘前大学を訪れていただければ幸いに思います。今後とも弘前大学にご声援とご支援を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。皆さんをお送りする言葉に代えさせていただきます。



卒業生・修了生のことば



# 卒業・修了にあたって



文化創生課程

坂田 篤哉

## 「自由」な5年間で学んだこと

「大学生は自由でいいね」と揶揄されることがあります。確かに、何にも縛られない怠けた生活を送ることもできます。しかし、私は留学期間を含む自由な5年間から、人生を左右する様々な経験を得ることができました。

学業においては、専攻している英語の学習に時間をかけ、専門的なスキルを身につけることができました。また、携帯ショップでのアルバイトでは、主体性と営業力を身につけることができました。トライアンドエラーから学ぶ楽しさを実感し、社会人に必要なスキルも学びました。そして、9ヶ月間のカナダへの留学経験を通しては、自分の強みであるチャレンジ精神とコミュニケーション能力に自信を持つことができました。

大学生生活とはとにかく自由でした。自由を理由に怠けることもできます。しかし、自由を活かしてチャレンジの場に飛び込み、チャンスを掴むこともできます。私は自由を最大限活かして、社会人になるための有意義な時間にすることができました。

大学生生活を何不自由なく送れたことは、恵まれていることだと実感しています。この環境を与えてくれた、両親、友人、大学関係者、全ての方々に感謝を込めて、社会人としての一歩を踏み出したいと思います。



文化創生課程

阿保 七海

## 自分を大切に

学食の好きなメニューはほうれん草のごま和え、新入生の私はこう言っていました。入学したての頃は周りの目を気にして過ごしていたため、「がっかりしたメニューを言ったら引かれるかも」と本気で心配していたのです。そんな私は、4年間の大学生活を通して、世の中には沢山の人がいて、一人一人生き方は違うという当たり前のことを実感し、自分のしたいことや好きなことを大切にできるようになりました。その結果、興味関心のある講義を選ぶようになったことで主体的に勉強をするようになり、卒論製作には力の限りを尽くすことができました。大学卒業後は、夢であった伝統工芸品製作の道へ進みます。別の職に就こうとした時期もあったのですが、やりたいと思っているうちにやってみようと思えました。

私は、弘前大学で過ごした4年間で大きな役割を果たしたことも部活に打ち込んだこともありませんが、個性豊かな友人とやりたいことをやってみる力を得ました。また、やりたいことに挑戦する中で、自分の気持ちに素直になることの重要性を知ることができました。これからも好きな学食のメニューを聞かれたときにチキン竜田井と言える自分を大切にしていきたいと思っています。



社会経営課程

一戸 裕佳子

## 充実した大学生活

弘前大学に入学してから今まで本当にあっという間の4年間だったなと感じています。この4年間で大学の勉強だけでなく、アルバイトや地域の活動に参加するなど初めての経験をたくさんすることができました。多くの人と出会う機会も増えたことで、内面的に大きく成長することができ、本当に充実した大学生活だったと思います。

特に、ゼミの活動では勉強以外にもみんなで飲み会や旅行に行ったり、ボウリングをしたり本当に楽しい時間を過ごさせてもらいました。こういった経験も春からできなくなるのかと思うとすごく寂しい思いでいっぱいです。ゼミだけでなく、大学で出会った友達や先生とのつながりはこれからも大事にしていきたいです。

最後に、今までたくさん支えてくれた家族や先生、そして友達には本当に感謝しかありません。本当にありがとうございました。春からも家族にはお世話になると思いますが、社会人として今度は支える側になれるよう、人との出会いを大切にしながら自分らしく頑張っていきたいと思っています。



学校教育教員養成課程

若松 真鈴

## 出会いと学びの4年間

泣いて喜んだ合格発表、慣れないスーツを着て迎えた入学式、慌ただしい春の事を今でも鮮明に覚えています。月日の流れは早いもので、ついに卒業の 때가やってきました。

私の大学生活は、出会いに恵まれた4年間でした。千差万別、個性豊かなフィルのみんな。それぞれの音を自由に奏でる姿に、自分は自分らしくいれば良いのだと気付かされました。教え導いてくださった先生方。授業や会話から多くの刺激を受けました。こうして思いをつづる機会も与えていただきました。そして、活発で勇気溢れる教育学部のみんな。全員が主人公でした。たくさん笑わせてもらい、誰よりも人の気持ちに寄り添ってくれるみんなに何度も助けられました。こんなに素敵な人たちと同じ時間を過ごせた事、志を共にして学べた事を誇りに思います。

思い出を胸に、いよいよ春からは教壇に立ちます。学び続ける教師でいられるよう、新しい場所でも自分なりに頑張ります。弘前での4年間、今がいちばん楽しい！といつも感じていました。これまでの人生を振り返ってみても、これほど充実した日々は他にありませんでした。出会ったすべての方々、そして夢を応援し支えてくれた家族へ、心から感謝します。ありがとう。



学校教育教員養成課程

木村 陸人

## 全ての出会いに、感謝

「ぶんぶく茶がま」というラーメン屋が本学のそばにある。笑顔が素敵なおばちゃんと大量の漫画本が出迎える温かでレトロなお店に小さい頃から足繁く通っていた。大学生となり、全メニューを制覇したことは、ずっと弘前で暮らしてきた私の小さな誇りである。

弘前で過ごした22年の中でも、大学生としての4年間は特筆して濃密であり、あっという間であった。多くのことを教え、導いてくださった先生方や先輩方には感謝してもし切れない。無駄に干渉しないと言いつつ支えてくれた家族には、これから恩返ししていきたい。そして何より、共に学び、ふざけ合った友人達の支えがなければ今の私はいない。これからも迷惑をかけるだろうが、お互い様と優しく許してほしい。出会い、関わってくださった全ての方に、感謝申し上げる。

コロナ禍で多くのものが奪い去られ、世界中が暗澹たる思いに打ちひしがれている。しかし、必ず笑って迎えられる未来がやってくる。そう信じているからこそ、我々は手を取り合い、力強く進むのだ。私は春から教師となる。未来を創る子供たちのために、私自身が学び続けていく。子供たちの成長を間近で見られることは私の生涯続く学びの原動力であり、私の大きな誇りである。



教職実践専攻

金田 宏樹

## 教職大学院での2年間

大学の4年間で北海道で過ごし、臨時講師として充実した日々を過ごしてきました。しかし、なかなか青森県の高校地理歴史の採用試験に受かることができず、自分を磨き、地元で採用になるべく弘前大学教職大学院に進学しました。それまでの社会人の身分から学生となったことで、環境や立場がガラッと変わった挙句、貯金は6,000円にまで減りました。学費など失ったものも多かったのですが、それでも、変わりゆく新しい時代に必要な視点をたくさん身につけることができました。さらに、派遣アルバイトの様々な派遣先の経験から、「歯車なんていない、社会人はみんな闘っている」ことを改めて感じました。恐らくあのまま教員だったら感じることはできなかったと思います。教員として子どもたちを社会に送り出す中で、この経験はかけがえのないものとなると思います。

最後に、お世話になった先生方や同期の仲間達、支えてくれた家族に深く感謝いたします。残念ながら今回も採用試験には合格できず、来年度から北海道で教壇に立つこととなりますが、教員として使命感を持って勤務することに変わりありません。これから教員として勤務していく中で、この大学院での2年間の学びを間違いではなかったと言えるように努めていきたいと思っています。



医学科

一戸 寛

## 同じ釜の飯は食えずとも

あっという間には長すぎる大学生活。2015年、平成何年だったか忘れましたが無事入学した私は、写真部そして大道芸サークルに入り、おそらく医学科史上初の大道芸人となるべく、1年生をスタートしました。早々に夢やぶれ大道芸サークル脱退、いつの日か披露する機会はあるそうでないものです。2年から4年はお勉強をがんばりました。振り返るとそれほどでもないですが、当時はなかなか大変だった気がします。でも不思議と振り返ると忘れてしまうから、将来学生には厳しくしようと思います。病院実習は班員に恵まれ、つらい記憶は忘れ去りました。よって臨床実習も学生に厳しく致します。「友人は高校で飽和、これ以上は名前を覚えられないぜ」と斜に構えていた私でしたが、実習班は人生でかけがえのない出会いでした。5年の班解散後、6年は眼科の実習から。斜に構え直したのも束の間、すぐに新たな班で意気投合。仄暗い部屋で眼球を見つめあい、瞳の奥、網膜にうつる血管の1本1本まで見えたのは、恋人はおりませんが恋人ともしたことの無い貴重な経験でした。

国家試験勉強の息抜きはビールと温泉めぐり。いつの日か青森あずまし温泉紀行を引き継ぎ、コラム「クラフトビールの勧め」連載が目標です。



医学科

小又 咲

## 卒業にあたって

弘前大学に入学してから、6年が経とうとしています。

6年間という学生生活は長いようで、あっという間だったと感じています。入学した頃は全てが初めてで、不安でしたが、月日が経つと共に多くの出会いや支えにより、毎日が充実していき、気付いたら卒業が近くまで来ています。

特に学生生活最後のこの1年間は、例年と異なる状況下で一瞬で過ぎて行ってしまったと思います。自粛期間で当たり前のことが出来なくなり、そこで気付かされたことも多くあります。授業では友達に会えず、実習では実際の臨床現場を感じられず、部活動では仲間ときつい時間や楽しい時間を共有できませんでした。普段は嫌だなあ、大変だなあと思っていた事でも、いざ無くなってみると寂しいものであり、これらが私の学生生活を充実させ、私自身を成長させていたのだなと実感しました。

春からは医師として働き始めますが、この6年間で学んだ医学知識だけではなく、出会いや繋がり、経験を大切に、立派な医師になれるよう励んでいきたいと思っています。

最後になりますが、今までお世話になった先生方、実習で出会った患者さん、同級生や先輩後輩、そしてなにより家族には感謝の気持ちでいっぱいです。6年間本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願い致します。



医学科

都留 朝希

## 大学生活を振り返って

故郷である兵庫を離れ、弘前大学に入学してから早6年が経とうとしています。6年前、受験で初めて弘前を訪れた際に、雪で真っ白になっている街並みを見て驚いたのがつい昨日のこのように感じられます。入学したばかりの頃は、卒業するのはもっと遠い先の話だと思っていましたが、勉強や実習、部活に追われる日々を過ごしているうちに、学生生活も国家試験と卒業式を残し、残りわずかとなってしまいました。

この6年を思い返すと、本当に充実した日々を過ごすことができました。膨大な範囲の定期試験に向けて必死に勉強したこと、大会に向けて弓道に打ち込んだこと、患者さんの前に立ち緊張しながら診察をさせていただいたこと、そして飲みに出かけたり旅行に行ったり大いに遊んだこと。大変な時期や苦しい時期もありましたが、辛いことも楽しいことも共有できる同期と支え合いながら過ごした日々は、どれも私にとってかけがえのない思い出です。

最後になりますが、お世話になった先生方をはじめ、同期や先輩、後輩、支えてくださったすべての方々から感謝いたします。感謝の気持ちを胸に、春から医師として精進してまいりたいと思います。6年間本当にありがとうございました。



看護学専攻

野口 麻衣

## 大学生活を振り返って

多くのことに挑戦し自分と向き合う4年間にすると決意した入学式が、とても懐かしく感じられます。青森の伝統に触れようと挑戦した津軽三味線サークル、空を飛ぶことに興味を持ち挑戦したパラグライダーサークル、さらに岩木山登山、弘前・白神アップルマラソンなど、自然豊かな弘前で様々なことに挑戦し、充実した大学生活を送ることが出来ました。

臨床実習では、実際に病院や施設で看護について学ばせていただきました。患者様の個性に応じた看護が大切だと分かっている一方で、患者様を多方面から理解し必要な看護を導き出すことは、とても難しいことでした。一人一人の患者様が求める看護、そして心のこもった温かな看護を実践できるよう、疾患や治療、副作用などの知識習得、患者様の変化に気付ける洞察力等を絶えず鍛えていきたいと思えます。

また現在、新型コロナウイルス感染拡大に伴って医療現場はひっ迫し、看護師不足も問題となっています。私も4月から医療従事者の一員となりますが、正直とても不安で一杯です。しかし、自分で決めた看護師としての道に覚悟と誇りを持ち、医療の場で貢献できるよう、一生懸命精進して参ります。

最後に、お世話になった先生方、大学関係者の皆様には深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



放射線技術科学専攻

高橋 大輝

## 大学での4年間を振り返って

入学当初は、親元を離れての一人暮らし、受ける講義の選択や専門的な内容の講義など、自分がこれまでの生活では無かったことを環境が変わってただでさえ不安ななかで経験することとなり「これが大学生なのか」と感じたのを覚えています。その後も勉強や部活面において新しい経験ばかりで苦労しながらも楽しく生活できました。"大学での4年間はあっという間だ"という言葉はよく耳にしますが、私の4年間も振り返るとそうであったと感じました。

特に4年次では新型コロナウイルスの影響により病院実習が中止され、不慣れなオンライン授業が始まりました。また、卒業研究においても昨年までは附属病院にてデータの実測を行っていましたが、今年はそれができず苦労した面もありました。さらに就活も難航し年度末には国家試験も控えていたため非常に不安を感じる一年でした。そのような状況のなかでインターネット等を介して、悩みを相談したり勉強面でわからないことを相談したりすることができた友達は私の心の支えになりました。

卒業後は地元の病院で働く予定です。この大学の四年間で得た知識や経験などを生かして私が理想とする放射線技師に近づくことができるように努めていきたいと思えます。



検査技術科学専攻

神田 詩歩

## 自由で恵まれた2年間

私は3年次編入学で弘前大学に入学しました。入学以前は臨床検査技師育成の専門学校に通っており臨床検査技師免許を取得後の入学でした。専門学校は、テスト、実習、レポートに追われる毎日。さらに大学入学のためアルバイトをしなくてはならず毎日が慌ただしく過ぎていく日々でした。しかし、大学では自由な時間が多くあり自分でやることを決めることが出来ました。勉強面では循環生理の二級臨床検査士を取得するため友達に被検者をしてもらい超音波検査の練習をしました。残念ながらCOVIDにより受験することができなくなりましたが、プライベート面ではパラグライダーサークルと探検部に所属し数多くの貴重な経験をし、今までの生活には無かった刺激的な体験をさせてもらいました。さらに、アルバイトではフィットネスジムのIRや個人経営でおいしい賄いを出してくれる居酒屋さん、弘前大学の学生や職員の心電図検査、大学病院病理部での補助作業、リンゴ農家での作業など様々な経験が出来ました。大学在学は2年という短い時間でしたが、人と環境に恵まれ本当にたくさんの人に助け支えて頂いたおかげで濃くてとても有意義な時間を送ることが出来ました。これからも周りの人と助け合い感謝し大切に人生を歩んでいきます。



地球環境防災学科

美濃嶋 巧

## 大学生活を振り返って

早いもので卒業を迎えようとしています。浪人を経て入学した私は生まれ育った北海道を離れ、知り合いも誰一人いない弘前の土地で不安で一杯だったのを覚えています。幸い友人にも恵まれ、教授陣も親身に接して下さり楽しい大学生活を送ることが出来、今では弘前大学で良かったと思います。

大学では授業内容はもちろんのこと、使用済み核燃料の話など青森県特有の事も学べ、学会では様々な国の人との交流など幅広く触れることが出来ました。大学生活は縛られるものが少なく自由な期間です。やりたい事にチャレンジできる最後の機会かもしれません。私は運転免許取得と学業に力を入れましたが、部活やリングに関するアルバイト等色々なことに挑戦できます。また、失敗できるのも大学生ならではの魅力だと思います。内面外面含めて身体の具合が悪い時は保健管理センターに話を聞けたり、就職に関してもキャリアセンターが助けてくれたり、様々な悩みは友達、教授や学生のサポーターが相談に乗って支えてくれました。

新型コロナウイルスの影響でこれからのことは誰にも分かりません。その渦中でも自分の譲れないところをしっかり持って生きていきたいと思っています。4年間ありがとうございました。



理工学専攻

佐藤 裕将

## 今言いたいこと

私の学生としての時間は博士前期課程修了と共に終了します。溢れてくる言いようのない心情は、私の人生における一つの物事の終端を目前にした今だから味わえる甘美と辛酸のオリジナルブレンドです。光陰矢の如しという有名な諺がありますが、情報通信技術が発達してモバイル通信回線も3G、4G、5Gと進化を遂げて高速化していくなか、光陰も高速化されているのではないかと思う今日この頃であります。

大学生活を振り返ると、あつという間の中で大変充実した時を過ごすことが出来たと思います。講義や研究室で友人と勉学に励み、お金欲しさにアルバイト、頂いたお金で友人と遊ぶ。大学生として出来る事を自分なりにやり切りました。弘前大学で送る大学生活が私以外の皆さんも充実するよう、私に与えられたこのスペースにて新入生と在学生の皆さんにはエール（声援）を、卒業生・修了生・退職者の皆さんにはエール（祝杯）を贈ります。

結びに、私がかげがえのない充実した時間を過ごすことが出来たのは、私をご指導して下さいました先生方や先輩方、支えてくれた家族や後輩のおかげです。これまでありがとうございました。そしてこの縁を結んでいただける友人へ、これからもよろしくお願い申し上げます。



機能創成科学専攻

山下 黄

## 弘前という地に

弘前に初めて来たときのことは今でもはっきりと覚えています。民放のテレビが3局しか見られず、JRも単線で、そのうえ下宿のお爺さんの津軽弁が全くわからなかったことに、驚き、戸惑いました。入学した大学は、大学としては狭く、思っていたような迫力を感じられませんでした。正直、最初はあまり好きにはなれず、自分がこの地に来たのは正解だったのだろうかと思ったこともあります。

それでも、この地で出会った人たちは、温かくいい人達ばかりでした。授業の合間に学科の友人達と学食で集まり遊んだことや、週末に部活の仲間と鍋を囲んで夜通し話したことは小さいことながら最高の思い出となりました。

この地の桜は、圧倒的で、雄大で、とても美しかったです。また、この地の豊かな食は一人になった私の心を癒してくれました。

あの日から9年がたった今、津軽弁も聞き取れるようになり、ラーメンは煮干が一番になりました。私は、弘前が大好きです。たくさんの経験をさせてくれた、たくさんの人たちと出会わせてくれた、弘前という地に、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます！





分子生命科学科

三浦 聖美

## 卒業するにあたって

2017年4月、弘前での上大学生活が始まりました。当初は大きな不安がありましたが、いざ始めると、あっという間の4年間でした。

大学では、生物や化学などの学問を学ぶだけではなく、学内アルバイト団体に活動することで、他学部他学科の人々と関わり、多様な価値観を知ることができました。また、ニュージーランドへの短期留学を通し、日本以外の文化や人々に触れることでさらに視野を広げることもできました。比較的落ち着いた学生生活でしたが、友人と楽しく過ごし、様々な経験ができた4年間だったと思っています。

そして、卒業する2021年、世界は新型コロナウイルスと戦っています。今まで当たり前と思っていたことが覆るといった経験をしています。これから社会に出れば、想定外への対応や時代の流れに沿った変更が求められる場面が出てくることもあるでしょう。どんな状況でも、物事を冷静に分析し、適切な判断ができるような人になりたいと思います。

最後に、これまでご指導いただいた先生方、私を支えてくれた友人や家族に感謝したいと思います。ありがとうございました。また、弘前大学で得た経験や知識を糧に、卒業生皆がそれぞれの場所で輝けることを願っています。



地域環境工学科

松田 任平

## 多くの貴重な経験

地元の静岡県から離れた弘前で、初めての一人暮らしが始まりました。家事に慣れていなかったため、初めの頃はよく親に電話していましたが、4年間で成長できたと思います。また、周りの環境にも恵まれ、大学生活は大変充実したものでした。

まず、私はよさこいサークルに入り、多くのすばらしい友人をつくることができました。友人たちとは、よさこい活動はもちろんですが、それ以外にも雪合戦やゲーム、旅行など様々な経験をともにすることができました。特に雪合戦は、地元でできなかったためとても楽しかったです。

また、大学生活では人生で初めてアルバイトをしました。自分で金を稼ぐことの大変さや接客の難しさ、効率よく仕事をする方法など学ぶことがとても多かったです。

勉強面では、専門的な知識を学ぶことができました。また、ゼミナールの活動において、青森県のみならず、他県に出向き、自分の知らなかった世界を肌で感じる事ができました。

以上の貴重な経験をすることができたのは、遠く離れた地元で支えてくれた家族をはじめ、かけがえのない友人、お世話になった先生方のおかげです。とても感謝しています。

4月から社会人としてまた、新たな経験を積んでいきたいです。



農学生命科学専攻

BUI THI HUYEN

## Nice memory in Hirosaki University

My name is Huyen, I'm from Vietnam. I am a master's student in Graduate School of Agriculture and Life Science. When I was a student in university in my country, my dream was studying abroad in Japan. Thanks to kindly support of professor in Hirosaki University, I got full scholarship for Master course.

Studying in Hirosaki University is one of the most wonderful experience. At the beginning I met some difficulties due to language, weather... but my professors and friends support me a lot; they also gave me opportunities to understand knowledge, culture, life-style of Japanese. Field trips and study camping with friends were exciting. Besides studying, I also enjoyed the festivals, events with local people, flowers arrangement ... It is so valuable for me.

Studying abroad is changing my mindset, giving good opportunity to study new things. If you also have dreams to study abroad, go ahead and get ready for any chance. You will have a nice memory for your life.



退職教職員のことば

# 退職にあたって



人文社会科学部  
国際社会講座  
教授

齋藤 義彦

## 退職にあたって

定年退職時に通常思い浮かべるべきことは、過去の節目となるような出来事であるはずですが、現在はそのようなゆとりはないような気がしています。右往左往しながら、ギリギリのところできれい未来を切り開いていくしかないような状況かなと思います。あえてする生産的な楽観主義もはばかれ、思考停止をもたらす悲観主義は言語道断というところでしょうか。待たなしの地球温暖化やデジタル化が迫る経済社会構造の転換、いつ起こってもおかしくない大地震への備え、少子高齢化に拍車をかける疫病への対応、累積する財政赤字の制御、歴史認識問題と東アジアの安定、格差・孤立社会の是正、核兵器・原発の制御などなど目の回るような課題ばかりです。誰もが気付いている凡庸なことを記し、一人一人がそれぞれの持ち場で、社会の安定に貢献していくことを祈りつつ、長年お世話になった職場を去りたいと思います。皆様ありがとうございました。



教育学部  
国語教育講座  
教授

吉田 比呂子

## 時 間

冬休み前にこの学園だよりの原稿依頼が届いた。しかし、約1ヶ月原稿依頼を忘れていて、昨日思い出して書き始めた。在り来たりな言い方だが時の経つのは本当に早い。弘前大学に着任したのは1988年9月だった。当時は教養部文学担当の講師として弘前にやって来た私は着任早々集中講義をして大学教官としての第一歩を踏み出した。大学という研究の場を得て、本格的に「語義の形成」や「解釈」についてゆっくり考える事ができるようになった幸運をかみしめていた。また講義の場や研究室で学生さん達の質問や雑談の中から論文を書くことができた。研究室で雑談をしていた学生さんの何人かは現在、研究者として活躍している人も居ます。今でも教養部の時のように文系理系に関係なく関われる「日本文化とは何か」のグローバル科目は、私が最も好きな講義科目です。何故ならば今、研究者として最も私が興味を持っている問題を自由に話せるからです。大学は専門学校ではない。大学に無用の用が何時までも存在できる場で有って欲しいと思いつつ、大学という場の最も良い時代に身を置くことが出来た幸運に感謝しつつ、ここで筆を置くことにする。ありがとうございました。



教育学部  
理科教育講座  
教授

大高 明史

## あつという間の31年間

1990年(平成2年)に弘前大学に赴任しました。森や湖や海が近く、研究場所にも遊びにも不自由しないことがわかり、すぐに気に入りました。野外実習として始めた十二湖の調査では、使い勝手がいい深浦臨海実験所の存在もあって、長く、研究の楽しさを学生と共有できました。理科棟に面した教育学部北側の中庭は、駐輪場になる前は、春先にザゼンソウなどが見られる湿地で、生物観察や焼肉パーティーなどで重宝していました。私の前任の平田先生は、この中庭でカモシカを飼育していました。平田貞雄(1998)ニホンカモシカ・ミミの一生(無明舎出版)は、このカモシカのころあたたまる飼育日記で、当時の教育学部や学生の様子が垣間見られます。私はこの空き地でノウサギの飼育を引き継いだのですが、強風でフェンスが壊れてみんな逃げ出してしまったからは、草ぼうぼうになりました。草食動物がいなくなると植生が一変することを実感しました。

31年間があつという間に過ぎたのは楽しかったからです。同僚の教員や事務職員の方々にはずいぶん助けられました。なによりも学生に恵まれました。長い間、ありがとうございました。



教育学部  
美術教育講座  
教授

## 蝦名 敦子

### 子供たちや学生と創造の喜びを共有して

弘前大学には、23年間、在職いたしました。この間、美術教育講座の先生方をはじめ、学部や大学の先生方、事務職員の皆様に大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

着任した1998年は、弘前大学大学院修士課程が設立され、スタートした年でした。2年後には生涯教育課程芸術文化コースが始まり、学生数も多く、卒業制作や修士制作など、毎年数々の素晴らしい力作を見せて頂きました。生涯教育課程で入学した最後の院生と一緒に退職となります。

また2009～2011年の3年間は、弘前大学教育学部附属小学校の管理職を併任し、大変貴重な体験をさせて頂きました。附属校の先生方の優れたご授業や、子供たちの学びの様子、作品を直接目にし、先生方の熱意と子供たちのその年代でなければできない表現に感動しました。

さらに地域の小・中学校の先生方との長年にわたる温かい交流もありました。

教育学部を通して、多くの方々とのつながりを持つことができました。人間のつくりだす姿、ともに作品を享受し合い、造形の創造の喜びを共有し合うことができたことは、とても幸せなことだったと思います。

最後に、今後益々の弘前大学の発展を心からお祈りいたします。有難うございました。



教育学部  
保健体育講座  
教授

## 清水 紀人

### 36年間で振り返って

1985年（昭和60年）3月に東京を離れ、期待に胸膨らませて着いた弘前大学の公務員宿舎。出迎えてくれた保健体育講座の事務官と学生の顔は今でも鮮明に覚えています。

一言で弘前に行くといっても、当時の東北自動車道は十和田南出口が終点。一般道で地図を頼りに山越えをして10時間という長時間の末、着いたわけですから、それは大変なものでした。

そんなこんなで弘前大学で教鞭をとることになるわけですが、昭和から平成へ、平成から令和へと3つの元号を過ごし、気が付いてみれば36年もの年月が過ぎていました。

あっという間と言えばあっという間、長い年月だったと言えばそうとも思える時間を、ここ弘前で過ごしたのだと他人事のように思う今日この頃です。

弘前大学で出会った学生たち。溺れそうな学生をおいて必死にゴールまで泳ぎ切った遠泳実習。校長として併任した附属中学校の生徒たちと行った修学旅行。なかなか卒業論文が進まない学生を叱咤激励した日々。その他にも様々な出会いがありましたが、思い返せば本当に素晴らしい36年間を過ごすことができたと言えることに感謝したいと思います。

最後に、弘前大学が、今後も地方大学としての使命を全うし、地域貢献に寄与することで益々ご発展されますことを願って結びといたします。



教育学部  
教育保健講座  
教授

## 太田 誠耕

### 定年退職を迎えて

いよいよ職場を去る日が参りました。1982年4月に教育学部に助手として採用され、昭和、平成、令和と3時代、39年間、弘前大学にお世話になりました。

その間にいろいろな入学試験を経験しました。私自身は国立一期・二期の時代に受験をしました。教員になってからは、共通一次試験、大学入試センター試験、そして今年は大学入試共通テストが新しく始まりました。参加大学が少なかったころは毎年監督があり、八戸などにも監督に行きましたが、参加大学が増えた現在は数年に1回と楽になりました。英語のリスニングが始まった時にはトラブルもあり、緊張しました。新しい共通テストではどんな学生が入学してくるのでしょうか。その時代の必要性に合わせて試験方法が変わるのだと思いますが、学生の質が変わったという印象はありません。

入学試験の方法が変わってもこれまで通りに優秀な学生に入学してほしい、そして卒業したら立派な社会人として活躍してほしいという願いは変わりません。

最後に在職中お世話になりました皆様に深く感謝するとともに、弘前大学の益々の発展を祈念いたします。



教育学研究科  
教職実践専攻  
教授

瀧本 寿史

## 退職にあたって

青森県立弘前高校校長退職後、教職大学院設置準備段階から5年間お世話になりました。高校生の時も、大学生・大学院生の時も「母校」という言葉に精神的に束縛されるのがいやで、できるだけ意識から遠ざけていたのですが、年齢を重ねるにしたがって、その母校での生活が今の自分の大きな糧となっていることを実感するようになりました。それにつけて母校を身近に感じるように、また身近に置きたいようになってきました。母校の弘前高校、そして弘前大学（人文学部でしたが）で教員生活を終えることができたことを、素直に嬉しく思っています。

教職大学院では総務部会長として主に青森県教育委員会との連携や教職大学院組織の運営に携わりました。専門の歴史関係では、国文学研究資料館との共同研究「津軽デジタル風土記の構築」プロジェクト研究代表として成果を上げることができました。このことによって「弘前大学表彰」を受賞できましたことを深謝いたします。弘前大学資料館兼担任教員として教育学部コーナーの展示替えを行えたことや、大学時代に所属していた僻地教育研究会の顧問となったこと、社会科教育講座関係の先生方と一緒に『教科書と一緒に読む津軽の歴史』（弘前大学出版会）を刊行できたことも大きな喜びでした。

この5年間に感謝し、退職にあたってのあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。



教育学研究科  
教職実践専攻  
教授

古川 郁生

## 文化の違いに戸惑った日々

教職大学院に勤務して4年になります。今思い起こせば「小・中学校との文化の違い」に戸惑った日々でした。私はこれまで中学校教員や教育行政に携わる日々を送り、無事定年退職を迎えてから、教職大学院に再度勤務したのですが、それまでの私の日常とは雲泥の差がありました。「アドミッションポリシー?」「シラバス?」……などなど、これまで私の世界では使われてこなかった言葉が当然のように飛び交う毎日でした。まるで東京都知事の小池百合子さんと話している気分で、大学では当然のように使われる言葉が全く理解出来なくて、毎日脳みその中が「???」の状態でした。4年たった今でもたまに「???」の世界に浸ることがあるのですが、さすが聞くに聞けずに、パソコンを使って意味を調べ、言われた言葉を理解し、仕事を進めるということがあります。

しかし、院生との授業においては、やはり私は教師だったのを実感出来る瞬間でした。共に学び、共に調べ、自分の知っていることを伝えることの楽しさは何事にも勝る時間で、公立中学校を60歳で定年退職してから、真の教育のあり方をもう一度見つめ直すことが出来ました。今ならもう少しきちんとした学校経営が出来るのではないかと思います。

このような機会を私に与えてくださった戸塚学前教育学部長、福島裕敏現教育学部長、そして教職大学院の先生方には感謝しても感謝しきれない思いでいっぱいです。本当に楽しく充実した時間を与えてくださりありがとうございました。



医学研究科  
眼科学講座  
教授

中澤 満

## 退任にあたって

1998年に前任地の東北大学から弘前大学へ転任して以来23年間お世話になりました。臨床医学の中でも眼科学に関して医学部学生の教育、大学病院での診療、大学院学生の研究指導、若手医師の眼科専門教育などバラエティに富んだ仕事をさせていただき、年を取るのも忘れて、気が付いたらいつの間にか定年を迎えていたという感覚です。この20年間の医学の進歩は急速であり、教授と雖も自分自身が日々研鑽していなければとても後進などを指導することはできず、必然的に毎日が勉強の日々でした。とくに医学教育において、医学は科学の一分野であるとともにサービス業、接客業でもあるという意識を学生や若手医師に徹底して示した積もりです。また、不幸にして難病で治らない病気を抱えた患者さんに対していかに対応するかという点も大きな課題でした。現状の医学の力では治療が望めないなら他にどのような代替手段があるかについて医療側からの情報提供なしには患者さんが難民と化してしまうという危機感から、障害者医療のあるべき姿を追求できたのも幸運なことでした。多くの障害者に障害年金などの公的支援の道を示すことができたかと自負しています。長い間本当にお世話になりましたこと心から感謝申し上げます。



医学研究科  
統合機能生理学講座  
准教授

山田 勝也

## ほかのどこでもこれほどに

通勤する人々が真っ直ぐ一斉に歩いてくる道の突き当たり、夜中も車が絶え間なく家を揺らす道路に面した家で育ち、知らない人に話しかけられたら危険と習った小学校。人の間に挟まれた鞆が手を離しても落ちないぎゅうぎゅう電車で家並みばかりの景色を毎日見ながらの通学時に夢見ていたのは緑を見たい、一日歩いても人に会わないような所に行きたいということでした。実家を出て初めて暮らした静岡は緑が多く夢かと思ひ、次の京都はプライドとときたりに驚き、就職した秋田は海も近く人も適度で理想郷でしたがやや乾いた感じも。ご縁があって弘前に住み10数年、ほかのどこにも増して感じますのは人情です。連れ立って歩く小学生から全開の「こんにちは!」。医学研究科のみなさま、附属病院の素晴らしい先生方、保健、農生、理工の先生方のご温情、身を以て示される生き様に頭は下がるばかりです。開発品の輸出入や数々お世話になりました歴代総務の方々、どれ一つとっても何年間も続くJSTや各国審査官との戦いを共にした研究推進課の皆様、世界に誇る技術と心意気をもつ地元企業の優しい方々の心根に触れ、我が身の非力も顧みず少しでも御恩返しできないかと思う気持ちが自然に湧いてまいります。あっという間の定年でしたが、心身が続く限り進めればと思っております。今後ともご指導の程、お願い申し上げます。



保健学研究科  
看護学領域  
教授

長内 智宏

## 定年退職に際して

本年3月に無事健康で定年を迎えられそうで、大変おめでたいことである。1980年4月に第二内科に入局し、本年まで循環器疾患の診療、研究、教育に従事してきた。その間、1989年から1991年までの2年間、米国のクリーブランドにあるCWRU (Case Western Reserve University) で細胞内情報伝達系の仕事に従事した。帰国後、新規の血管作動物質やアンチエイジング蛋白質の研究、さらには冠攣縮の病態解明に多くの時間を費やすことができた。大変幸せなことである。また、最後の6年間は、看護学の重要性に目覚め、その教育に従事できた。41年間という人生の大半を弘前大学で過ごしたことになるが、よく考えてから走り出したり、走ってから考えたり、器用なことではできず、常に走りながら考え続けてきたように思う。多くの先生方のご指導を仰ぎ、支えられ、定年を迎えられることを誇りに思い、新しい第二の人生に旅立つ予定である。



保健学研究科  
放射線技術科学領域  
教授

中川 公一

## 弘前での研究生生活を振り返って

初めての学園だよりです。私は、本学の保健学研究科に赴任して10年が過ぎました。赴任前に考えていたXバンド(9 GHz)電子スピン共鳴(ESR)イメージングの試作で成果を上げることができたのは、多くの方々のご支援のおかげでした。

私が所属する放射線技術科学専攻では、担任をはじめいろいろな委員を経験させていただきました。研究室自体は、小さく世間に宣伝するほどではありませんでした。アメリカの大学院で学んだ基礎知識の応用は、福島医大時代の下積みを経てESRイメージングを日本学術振興会の科研費で、それなりの装置として立ち上げることができました。この装置は、世界的に見ても少ない装置のひとつで、この装置を使い多くの皮膚科学や反応中間体ラジカルに関する新しい研究成果を上げることができました。この研究成果が認められて、日本油化学会の学会賞をいただくことができました。

弘前での研究や教育で自身が学んだことは多くありましたが、特に、大学・人・環境など新たに学んだこともありました。一方で、犠牲にしたものもありますが、今後少しでも取り戻すべく精進しようと思っています。



保健学研究科  
生体検査科学領域  
教授

中村 敏也

## 感謝と想い

1982年に医学部生化学第一講座に助手として入職以来、様々な出来事があったはずなのに、今ではあっという間に思える38年間でした。医学部基礎での15年間は私にとって修行の時代でしたが、世界で勝負する研究者としての基礎を叩き込んで頂いたと思います。1997年に医療技術短期大学部に異動、その後、医学部保健学科、大学院保健学研究科と所属名は変わりましたが、この間を通じて共に過ごした先輩や同僚、また学生たちの姿が次々に思い起こされます。自身の研究で特に思い入れのあるのは、ヒアルロン酸の新たな分解機構の扉を開いた研究、ヒアルロン酸合成抑制剤の発見、ヒアルロン酸合成酵素の活性調節に関する研究等で、ヒアルロン酸研究の進展に少しでも貢献できていたら幸いです。また、被ばく医療人材育成において、検査部門、教育部門、そしてグローバル人材育成推進部門として10数年間取り組むことができたのは、保健学研究科や被ばく医療総合研究所の皆さまのおかげでした。思い残すことなく退職を迎えることができる幸せを、学生たちへの感謝の気持ちとともにかみしめています。心より御礼申し上げます、保健学研究科のさらなる発展を願ってやみません。



理工学研究科  
教授

中里 博

## 退職にあたって

私が弘前大学に赴任した同じ年に白神山地が世界遺産に登録されました。もう随分と時間が流れました。この間、若い大学生と教育を通じての交流や専門の数理科学の研究はとても知的な刺激に満ちたものでした。赴任した頃を思い出しますと、大きく変わったことの一つは、教育研究や事務的な手続きでネット環境を使うことが格段に増えたことです。特にこの1年は、メディアによる授業はなかなか不慣れで辛い点も多々ありましたが、新しい教育方法に繋がる面がたくさんあったと思います。印象深いことの一つに卒業研究で数理科学や時空の幾何学を学生と一緒に勉強したことが挙げられます。セミナーの学生の慣れの速さにしばしば驚きました。また、専門の数理科学の研究では、台湾、ポルトガル、米国、ギリシャ、イラン、韓国、モンゴルなど外国の研究者と知りあい共同研究し論文を出したことが最も記憶にあることです。間もなく勤務も終わりとなりますが、優秀な教職員に囲まれ良い環境で教育研究に携わることができましたのは、まことにありがたいことです。感謝申し上げます。また、楽しい時間を一緒に前向きに過ごした学生の皆さまにもありがとうございます。弘前大学のますますの発展と関係する皆さまの御多幸を祈念いたします。



理工学研究科  
教授

澤田 英夫

## 弘前での18年と6ヶ月

大学院修了後、民間の研究所に13年間お世話になり、次いで奈良で9年と6ヶ月間、教育と研究に携わる機会を頂きました。その後、弘前大学に赴任して以降、今までの経験を教育と研究に全力で注ぐ意気込みで駆け抜けた18年と6ヶ月間であります。弘前ではお陰様で研究室内の留学生を含む多くの優秀な学生にも助けられ、外部の研究機関との共同研究も数多く展開でき、弘前大学発ベンチャー企業設立へと繋がりました。講義では企業での経験談等も盛り込み行うように努めました。

研究室内の学生には研究成果を自分で纏め、一つでも多くの海外を含めた他流試合（学会発表）を行い、多くの方々に研究成果を理解してもらえようという研究指導を心がけました。自分の研究成果を分かり易く説明できる能力を身につけることは、近い将来企業等に就職したときに必ず活かされ、特に“知識”と“知恵”の違いを強調し指導を行いました。即ち、“知識”は企業等の研究開発では人とのコミュニケーション等を通して容易に得られるものの、“知恵”はその人のオリジナルな発想（創造）によるもので、企業等で必要とされる人材はこの“知恵”を如何に発揮できるかであり、この点を研究活動を通して身につけて欲しいと指導してきました。

ここ弘前にお世話になっていろいろなことが経験でき、研究室から社会に出て行った学生一人一人の専門能力が高められたことを自負できることは掛け替えのない喜びでありました。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて頂きました弘前大学の皆様に厚く御礼を申し上げます。



理工学研究科  
教授

小菅 正裕

## いつか来るいざという時

1981年から40年間にわたって、地震に関わる教育と研究を行ってきました。私の赴任は理学部（当時）附属地震火山観測所ができたことによるものでした。その2年後の1983年に青森県西方沖でマグニチュード7.7の日本海中部地震が発生し、弘前大の観測所は震源に最も近い観測網からの貴重なデータを提供することができました。地震の観測や研究は大きな地震の発生の影響を受けます。大学での観測が臨時観測に重点を置く方向にシフトするきっかけとなった1995年阪神・淡路大震災は大きな出来事でしたが、地震研究者に最大の衝撃を与えたのは何と言っても2011年の東日本大震災です。私自身の研究は地震波から震源や地下構造に関する情報を探ることですが、そのような研究が災害軽減に何の役にも立たなかった無力感に苛まれながらも、地震を理解することを地道に続けるしかないと考えて研究を続けてきました。弘前大の教育において少しでも役に立てばと、教養教育科目として「生き延びるための地震学入門」の授業を行ってきました。日本に生きる以上、地震から逃れることはできませんが、災害を減らすことはできます。いつか来るいざという時のために、災害を「我がこと」として考えてほしいと思います。



理工学研究科  
総務グループ  
係長

鈴木 純子

## いろんな事が経験できました

昭和54年6月に理学部生物学科に採用され、学生課では健康診断の仕事、附属病院では医事課で患者の窓口対応を経験、管理課では物品の調達、2000年問題では医療機器の誤作動が危惧され、12時過ぎまで皆で待機し紅白を見ながら病院で年を越しました。

附属学校では、学園町で小学校・幼稚園、富野町で養護学校の事務を経験し、子供は障害があっても親の育て方で違う事を、また、先生方も子供達みんなを主役にする事を考えており、親御さんが、養護学校の学芸会で、今まで片隅にいた我が子が主役で真ん中にいるのを見つけ、喜んで涙している姿を何度か見ました。

故安藤房治先生が『養護学校365日』を執筆したのも、毎日、養護学校の様子を日誌につけていて、事務等でコメントしているうちに、ついに本になって刊行したものです。

人事課、保健管理センターでは、法人化となり、労働基準法の基に健康診断や長時間労働などさまざまな規則が変わり、研究推進課、農学生命科学部、理工学研究科では研究協力の仕事に携わり教員のサポートや外部資金の規則の違いに翻弄された毎日でした。

最後になりましたが、お世話になった方々にこの場を借りて御礼申し上げます。



農学生命科学部  
食料資源学科  
教授

青山 正和

## 昭和～平成～令和

弘前大学に着任したのは昭和57年（1982年）の春、その後平成を経て令和の時代まで39年間に渡って勤めてまいりました。この間のもっとも大きな変化は、アナログからデジタルへの転換でしょうか。昭和には、論文投稿する場合、和文誌には原稿用紙に手書きで、欧文誌にはタイプライターで清書し、書留で投稿するのが一般的でした。けれども、平成を迎えるとパソコンが普及し、原稿はすべてワープロ打ちが一般的になりました。さらに、21世紀を迎えてインターネットが普及するとともに、すべてをメールでやり取りする時代となり、論文もオンライン投稿、オンライン査読となりました。とはいえ、平成半ばの法人化以後、教員の業績評価が厳しくなる一方で、論文がそれなりのジャーナルに採択されるのも年々難しくなっていると感じます。

令和も始まって二年目の今年度は、コロナ禍の中で授業の大半をオンラインで行うこととなりましたが、これまで学部の授業はすべて板書で行ってきたので、必死でパワポを作成しつつ、若い先生方に授業用アプリの使い方を教えていただきながら、現職最後の年度の授業を何とかこなしてきました。弘前大学在職中は、多くの方々のお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後の弘前大学のご発展を祈念しております。



農学生命科学部  
食料資源学科  
教授

佐野 輝男

## 29年前の思い出

1992年4月5日夜、特急「白鳥」でJR弘前駅に着きました。改札を出ると遅い時間にもかかわらず原田幸雄先生がご夫妻で迎えに来てくださっていました。紙漉町の文京荘へ案内していただき一泊。翌朝は、朝食を済ませてまもなくすると、階下で私の名前を呼ぶ声。玄関に行くと藤田隆先生が迎えに来てくださっていました。先生に連れられて弘前大学へ、途中、細い小径の両側に並ぶ、生垣や板塀に囲まれた静かな住宅街の雰囲気印象に残りました。確か、教育学部の脇の道から大学の構内に入って農学部へ。弘前大学にはそれ以前にも何度か実験材料（ウイルスに感染したりんごの花）の採集でお邪魔したことがあったので、研究室の様子は何となく覚えていました。研究室のゼミ室兼図書室兼お茶や休憩そして来訪者との打合せ場所であった「植病ゼミ室」に着いていろいろな方々と顔合わせ。当時はまだ小講座制の時代で、研究室は原田先生、藤田先生と私の3人体制、名誉教授の澤村健三先生もいらっしゃいました。私自身、手持ちの実験機器も研究費もなく、弘前の町の様子も全くわからない状態でしたが、寛容に受け入れていただき不自由を感じることもなく、私の弘前大学そして弘前での生活が始まりました。あれから、29年、紙面には書ききれないたくさんのお会いがありました。定年あたり、このような教育・研究活動の場を与えてくださった方々、支えていただいた方々に感謝いたします。長い間ありがとうございました。



農学生命科学部  
地域環境工学科  
教授

泉 完

## 弘前大学にお世話になって

私は、平成6年11月に当時の農学部農業工学科に着任し、以来、26年にわたり弘前大学にお世話になりました。研究室では、フィールドワークとしての「魚道の研究」を精力的に行い、調査では、院生・学生とともに現地に寝泊まりし昼夜を通した24時間で、かなりの労力を要するものでした。調査を通して、いったい魚はどれくらい速く泳げるのか？との疑問を強く抱くようになり、魚の遊泳速度に関する研究へと展開させました。「現地で計測することがより实际的」という視点で、現地河川の魚道中に「院生・学生手作り（ここが大学としての強み）」の遊泳実験装置を設けた実験です。幸いに現地での遊泳実験として河川生息魚の遊泳速度に関する数々の新たな知見を得ることができました。調査や遊泳実験は現地で実証的に行ったもので調査・実験研究をとおして、魚から多くのことを学んでいると痛感しています。大学の教育機関として、院生・学生に対する指導とともに彼らの協力なしでは成しえないもので、苦楽をともにした院生・学生に大変感謝しています。今後の大学の益々の発展を期待しております。長い間大変ありがとうございました。



保健管理センター  
教授

高梨 信吾

## 弘前での43年を振り返って

まさか、弘前大学の教官として、65歳の定年を迎えるとも思っておりませんでした。

私は昭和50年、19歳で弘前大学医学部に入学しました。卒業後は、そのまま第二内科の大学院に進学、卒業後数か月は、いわゆるお礼奉公として県内の病院に勤務しましたが、同年に弘前大学に戻り、第二内科助手を11年、講師を7年、准教授（助教授を含む）を6年勤めました。平成21年からは、保健管理センター教授として12年勤務。気が付くと、留学期間の2年を除いた43年間を弘前大学で過ごしたことになります。これだけ長く、弘前に居たのは、弘前の居心地がよかったからだと思います。学生生活も満喫し、医師になってからは、大学での教育、診療、研究など、多忙ではありましたが、先輩や周囲の方にも恵まれ、楽しく充実した時間を過ごすことができました。問題も多くありましたが、今思い返しますと、懐かしさだけがこみあげてきます。あまりにも長い時間を弘前大学で過ごしたので、定年を迎え、足場を失うような寂しい気がします。私は、今後も弘前に居住し、すこしは地域医療にも貢献していくことを考えています。これからは、外から弘前大学の発展を見守りたいと思います。



医学部附属病院  
医療技術部（放射線部門）  
主任診療放射線技師

植木 聡

## 善 進

退職を前に三十数年を振り返り先輩方、同僚、お世話になった方々全てに感謝いたします。

入職当時、職場内環境は今と大きく異なり、ある部分封建的という言葉に置き換えられる事もありましたが時代と共に多様な変化を続けてきたと感じています。

また懐かしさを覚えるのは、若い頃によく食べた食堂のオムライス、発表ギリギリまで奮闘したスライド作り、日常業務後に行う実験など楽しみとキツさの思い出です。

若い頃のストレスと五十代でのストレスは違いがありますが、“職務におけるストレスは、ないはずがない。”と言われる中、臨機応変的な適当さを持ってたらどんなに気楽だろうと思えた時もありました。楽な仕事をするのではなく、楽な気持ちで取り組めるのかと気づいた時には間もなく定年という年代になっていたのを痛感しています。

最後に皆様のご発展を祈願し自分の職務を終えたいと思います。



医学部附属病院  
看護部  
看護部長

小林 朱実

## ありったけの感謝をこめて

多くの皆様に育て支えて頂き、無事定年退職を迎えることができました。ずっと待ち望んでいたほっとした想いと、まだ実感のない想いなどうまく言葉に表しきれませんが、感謝の言葉しか思いつきません。

教育学部の学生時代4年間を含めると、弘前大学には40年間お世話になりました。徹夜で書き上げた卒論、そして附属病院に入職し、定年まで勤められたのも、弘前大学という環境と人に恵まれたおかげです。失敗と反省ばかりの日々でしたが、小児科の子どもたちの健気な笑顔と涙、家族の苦悩、すぎるような患者さんの表情、白衣をつかんで離さない患者さんの手のぬくもりなど忘れられない出会いや別れが沢山ありました。看護の魅力や可能性を深く感じ、たくさんの患者さんとご家族に育てて頂きました。また、自分では思い描いていない方向や機会を頂き、気がつけば実践者から管理者になっていました。副看護部長の12年間は、教育担当として、新人教育や職員の育成を自由に色々なことをさせて頂き、充実した時期でした。大学院で学ぶ機会も得ました。当時新人だった職員が今は看護部のリーダーとして活躍している姿を見るととても嬉しく頼もしいです。

看護部長としての8年間は、病院の経営、看護師確保等に苦慮しましたが、看護の質や働きやすい環境の改善に取り組み、貴重な経験でした。最後の年は、コロナ禍という未曾有の状況でしたが、使命感で懸命にケアをする看護職の姿はとても誇らしく、地域の看護の拠点としての役割を果たすことができました。一刻も早く終息し、職員ひとりひとりがやりがいと望む看護ができる日々が訪れることを願っています。最後にありったけの感謝と弘前大学の益々の発展と職員の皆様のご健康を心より祈念しております。





医学部附属病院  
看護部  
副看護部長

工藤 順子

## 定年退職を迎えて

昭和57年4月に入職後、39年間勤務させて頂き、この春定年退職を迎えます。これまでお世話になった皆様に感謝申し上げます。最初の配属先は外科病棟で医師にガーゼを渡すだけでも緊張で手が震えていました。そんな私を教え励ましてくださったのは諸先輩方と、未熟な看護技術でも笑顔で受け止めてくださった患者さんたちでした。平成元年の新病棟移転では、当時の助教授と病棟医長がトランシーバーで連絡を取り合いながらの患者移送でしたが、直後に患者が急変し物品保管場所が分からない中での処置等、とても長い1日を経験しました。第一病棟6階へ異動した時は慢性期病棟の時間の流れに戸惑い、第一病棟3階（小児科）では、療養する子どもたちの強さと笑顔に励まされました。平成17年、WordもExcelも初めましての状態で電算担当になり、医療情報部の方々に大変お世話になりました。平成23年からは副看護部長として他職種の方々と協働する中で、チーム医療の難しさを感じつつも「チーム弘大病院」の素晴らしさを実感しました。また、今年度はコロナ禍でこれまでと全く違った環境の中、各自が自分の役割を粛々と遂行している姿に感謝と感動の日々でした。ありがとうございます。弘前大学のさらなる発展と皆様のご健康を祈念致します。



附属図書館  
資料管理グループ  
主任

佐藤 勝美

## 定年まで仕事を続けてこられました

振り返ってみれば、弘前大学職員に採用されたのは1990年1月だった。最初の配属先は附属病院5階の総務課でワープロかパソコンが係に1台で交代で使用した。最初の頃はパソコンを教えてもらいながら仕事を覚えた。山形県出身なのでこちらの方言も教えてもらった。5階の大部屋には大勢の職員が出入りされていた。それが配置転換の度に当時見かけた人もいたりして安心したのを覚えている。その後教員との対応が多い所などさまざまな経験をさせていただいた。現在は附属図書館で寄贈本の受入れ業務をしている。周りの方々に世話になり今日があるのだと感謝している。さて、「継続は力なり」と言われる。私は十数年前に圧迫骨折となり1か月ほど胴にオーダーメイドのコルセットをした。それ以来バランスの良い食事や運動（散歩）、休養を心掛けた。だが継続するのは難しい。運動など忘れてたりする。それでも強制しないとか、また始めればいいという考え方を知った。そのほうが続く。仕事に得意不得意があっても長く続けてほしい。周囲の人も応援してくれると思う。ありがとうございました。



学務部  
学生課  
調理主任

小林 直美

## 定年退職の年を迎えて

昭和55年4月附属病院医事課給食係調理師として採用になりました。大学病院からの求人が専門学校へあり、患者食を作るという業務に携わると思い、就職しました。給食係で沢山の事を先輩方に教えて頂き、そのことが自分の土台となり今こうしている事に感謝いたしております。給食業務の一部委託から全面委託に伴い附属病院から学務部厚生課学生寮へと移動になったのは、平成9年4月です。令和3年までの長い間、学生課で多くの方々のお世話になりました。北溟寮、朋寮、北鷹寮と三寮で沢山の学生の皆さんと一緒に沢山の時間を共に出来たことが私の一番の倅せであり誇りです。専門的な話を色々と聞いているうちに沢山の事を考えることが出来て、何よりも励まされて支えられてきたと思っております。卒業された学生の皆さんと在学中の皆さんの健康と倅せをこれからも願っております。弘前大学に勤務し多くの学生の皆さんと関わる事が出来、多くの上司の方々、係の方々のお陰で、ここまで来る事が叶いました。在職中お世話になりました皆様深く感謝いたします。今後もさらなる弘前大学の発展を祈念いたします。



図1 2020年度吉澤・鷺坂研究室のグループ写真（最前列右端が筆者、最後列左端が吉澤教授）

# 研究室紹介

## 理工学研究科 物質創成化学科 鷺坂研究室

准教授 鷺坂将伸

### 1. 研究室の概要

2004年に弘前大学理工学部の助教に着任してからこれまで、筆者はコロイドおよび界面化学の研究に従事してきました。現在、研究室メンバーは、学部3～4年生6名、博士前期課程1～2年生5名、博士後期課程1名の12名ですが、同じ物質創成化学科で、研究分野の近い吉澤篤教授の研究室とともに活動しており、全体としては20名以上の研究グループになっています（図1）。

筆者が所属する物質創成化学科では、新しい試みとして学部3年生後期から研究室に配属するようにしています。3年生には卒業研究のトレーニングとして、授業の空いた時間に企業との共同研究をサポートしてもらい、鷺坂研究室の研究について理解を深めてもらっています。卒業研究・修士論文研究では、国際連携や社会貢献を強く意識してもらうため、海外の大学・研究機関や国

内企業との共同研究、または科研費関連の研究に従事してもらっています。最初こそ筆者自身から研究アイデアをもらい受け、助言に従い研究を進めてもらいますが、大学院進学後には独自の研究アイデアを軸に新規化合物・材料の設計・合成を進め、自身が作った化合物・材料の分析、物性評価、データ解析などの基礎研究、そしてそれらの応用研究に至るまで、できるだけ広く化学研究のおもしろさを体験してもらるようにしています。

### 2. 研究内容

#### 2.1 環境調和型低表面エネルギー材料の開発

撥水性や撥油性を示し、表面張力（または表面エネルギー）を著しく低下させる低表面エネルギー（Low Surface Energy, LSE）材料は広く利用されていますが、テフロンに代表される低表面エネルギー有機フッ素化合物は、高価、生体蓄積性が

あり、発がん性も懸念される物質です。一方で、最近では、体内に取り込まれてしまった有機フッ素化合物PFOSが、新型コロナウイルスに対する免疫作用を低下させることも懸念されています。2004年弘前大学赴任当初は、有機フッ素化合物特有の高い性能に強く惹かれ、フッ素化された低表面エネルギー界面活性剤（LSE Surfactant, LSES）の研究を進めていましたが、このような背景のもと、2008年から非フッ素系LSESの開発に取り組んでいます。代表的な成果としては、①フッ素系LSESと同等の低表面エネルギーを作り出す非フッ素系LSESの開発（水の表面張力を70%低下）、②撥水表面を高速で親水化する高速湿潤剤の開発、③非フッ素系LSEモノマーの合成と、それによるPetal効果（バラの花弁のように水滴をピン止めする効果）およびLotus効果（蓮の葉のように水滴をはじく効果）をもつ非フッ素系超撥水ポリマー薄膜の調製

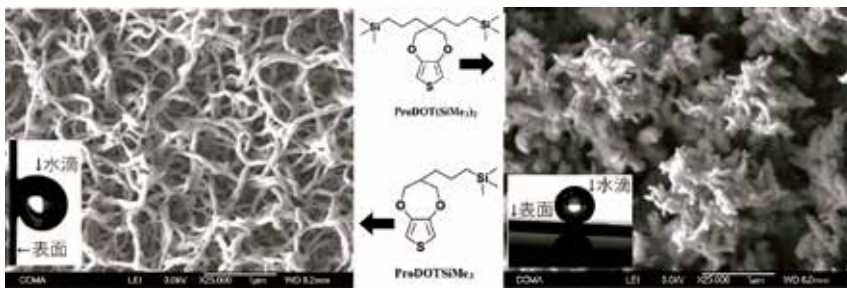


図2 非フッ素系LSEモノマー(中央)を利用して合成された撥水性ポリマーフィルム表面の走査型電子顕微鏡像(左) Petal効果を持つ表面、(右) Lotus効果を持つ表面)

(図2)、④LSESによるナノ炭素材料(グラフェンやカーボンナノチューブ)/天然高分子(天然ゴムやセルロース)/水分散液の調製と、それによる高導電性高分子膜(既報よりも10倍以上の導電性)の調製があります。

## 2.2 超臨界CO<sub>2</sub>系コロイドの開発

超臨界CO<sub>2</sub>は、ヘキサンに似た極性をもち、無毒、不燃性、低コスト、豊富に存在するといった利点もあり、VOC代替溶媒として工業利用されるようになってきました。残念ながら、超臨界CO<sub>2</sub>は、高分子や不揮発性極性物質に対しては貧溶媒であり、また、粘度がかなり低いため原油増進回収(EOR)での利用の際は回収効率を低くしています。より広範な応用、効率化にはコロイドを形成させ、溶媒物性を改善することが必要です。例えば、酵素反応やドライクリーニング、染色、微粒子合成などへの応用に向けては、ナノサイズの水粒子を分散させたW/CO<sub>2</sub>マイクロエマルジョンの形成が、EORには増粘させる棒状逆ミセルや泡(CO<sub>2</sub> foam)の形成が望まれており、それらの構築に向けて新たな界面活性材料を開発しています。上述の開発されたLSESやその設

計理念は、これら超臨界CO<sub>2</sub>系コロイドの構築に役立ち、開発に成功することができました。現在では、それらコロイドを利用したドライクリーニング、微粒子合成、EORへの応用研究も進めています。

## 3. 学外での研究活動

鷲坂研究室では、大学院在学中に国内学会だけでなく、できる限り多く国際学会で成果発表をしようとしています。直近では、2019年11月の奇しくも首里城焼失の1週間後に、沖縄の万国津梁館で国際学会Okinawa Colloids 2019が開催され、筆者の研究室の3名の学生がそこでポスター発表を行いました。つたない英語での説明でしたが、何とか海外研究者に理解してもらおうと奮闘していました。残念ながらポスター賞を得ることはできませんでしたが、国際的研究者への第一歩として良い経験を積むことができたのではと考えています。

また、毎年8~10月に超臨界流体を研究する東北大学、東工大、東京理科大学、金沢大学、日本大学、産業技術総合研究所、八戸高専な

どの研究グループとともに3日間合宿形式でミニワークショップを開催しています。2019年は茨城県にある東京理科大学の施設を利用して開催されました。各研究室の参加学生はポスター発表や講演会だけでなく、懇親会やバー

ベキューもあり、寝食を共にし、朝早くから夜遅くまで大学間交流が活発に行われました。別れ際に「また来年もミニワークショップで会おう!」と他大学の学生と別れを告げていたことから、研究を通じて他大学学生と良い友人関係をつくることのできたのではと考えています。

## 4. 国際共同研究への取り組み

上述の研究のため、筆者は年2回、計3週間ほど英国オックスフォードシャー州のラザフォード・アップルトン研究所に滞在し、英国ブリストル大学やスオンジー大学の研究者とともに、分子集合体やナノ粒子に対して小角中性子散乱(SANS)測定を実施し、その存在の証明やナノ構造評価を行っています。その他にも、W/CO<sub>2</sub>マイクロエマルジョン研究には英国クィーンズ大学ベルファスト、CO<sub>2</sub>増粘剤開発には米国ピッツバーグ大学、高速湿潤剤開発には英国バーミンガム大学、撥水性ポリマー薄膜合成には仏国コート・ダジュール大学、導電性高分子薄膜開発にはマレーシアのスルタン・イドリス教育大学の研究者とともに研究を進めています。また、JSPSの外国人特別研究員制度を利用して、共同研究を行っている英国ブリストル大学から2013-2015年にDr Craig James、2019年にDr Christopher Hillを研究室に受け入れ、共同研究の発展に貢献してもらいました。このような海外研究者との交流が、学生を国際的研究者へと成長させてくれると期待しています。

## 5. 終わりに

昨年12月に令和2年度弘前大学学術特別賞を頂戴しました。このような栄誉ある賞を頂けたこと大変光栄に思っています。今後も弘前大学の教育・研究の発展に貢献できるように精進していきますので、どうぞ支援頂きますようお願いいたします。

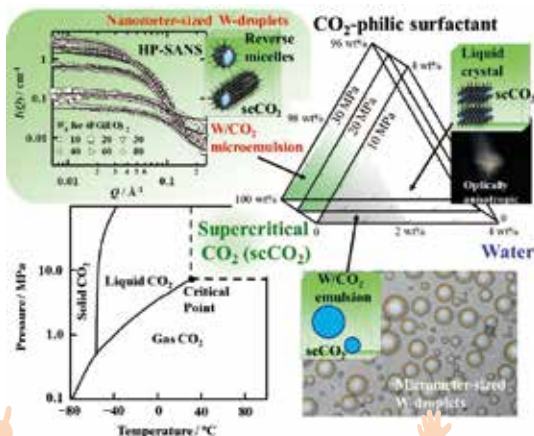


図3 CO<sub>2</sub>の状態図(左下)と超臨界CO<sub>2</sub>を溶媒とした水/界面活性剤混合物の三成分相図(右上). (左上) W/CO<sub>2</sub>マイクロエマルジョンや棒状逆ミセルの存在を証明するSANSデータ、(右下) W/CO<sub>2</sub>マクロエマルジョンの光学顕微鏡像

New Face

# はじめまして 新任教員紹介

個性豊かな7名の教員が  
新たに着任いたしました



医学研究科

附属健康未来イノベーションセンター

教授 玉田 嘉紀

令和2年11月より健康未来イノベーションセンターの専任教員に着任いたしました。専門は人工知能を用いた大規模医療・生命科学データ解析です。これまでバイオインフォマティクス分野の研究が主でしたが、前職で医療データ、特に弘前大学COIの岩木プロジェクトのデータ解析に取り組んだ縁で弘前大学にきました。ここ弘前の素晴らしい環境の中で研究教育に邁進していきたいと思っております。みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。



農学生命科学部

国際園芸農学科

准教授 柳 京熙

令和2年10月に着任しました柳京熙(ゆう きょんひ)と申します。出身は韓国のソウルです。来日して今年で30年になります。専門は農業経済学ですが、近年FTAおよびTPPなどの国際交渉に伴う農業への影響について研究をしています。同時に農協による販売戦略についても研究をすすめています。これからは教育に力をいれ、国際的に通用できる学生を育てられればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



教育推進機構

教育戦略室

准教授 宋 美蘭

2020年12月1日に教育推進機構・教育戦略室に着任いたしました。宋美蘭(ソン・ミラン)と申します。出身は韓国釜山です。弘前大学に着任する前は、北海道大学にて研究・教育に携わってまいりました。専門は、教育学です。近年は、比較教育や教育社会学の視点から社会的・教育的困難を抱えている子ども・若者の学びの保障、そして「学校」から社会への移行問題について関心を寄せて取り組んでいます。教育戦略室では、大学の教養教育におけるカリキュラムの開発・改善、そしてそれらを再構築することが私に与えられたミッションの一つです。「地域志向型」教育を目指す、弘前大学の教養教育の構築に向けて尽力していきたいと願っております。



教育学部

学校教育講座

准教授 越村 康英

令和2年10月に着任いたしました。専門は社会教育学です。より良い生活と、その基盤となる地域を創造するための市民主体の学習活動・地域活動について、県内の多彩な実践にも学びつつ探究していきます。そのためには、まず私自身が「津軽の人」になること。東北での生活ははじめてですが、人との出会いやつながりを大切に、地域にしっかり根を下ろしながら教育・研究活動に取り組みたいです。どうぞ、よろしくお願いいたします。



農学生命科学部

国際園芸農学科

准教授 小早川 紘樹

令和2年12月に農学生命科学部国際園芸農学科に着任いたしました。小早川紘樹と申します。専門は作物学で、これまで日本の主要作物である水稻に及ぼす地球環境変動の影響評価や作物の高品質化に関する研究などを行ってきました。今後、これまでの研究をさらに発展させるだけでなく、青森県の地域に根差した研究も行っていきたいと考えています。至らない点多々あるかと思いますが、皆様どうぞよろしくお願いいたします。



被ばく医療総合研究所

助教 藤嶋 洋平

令和3年1月1日付けで被ばく医療総合研究所 リスク解析・生物線量評価部門に着任致しました。藤嶋洋平(ふじしまようへい)と申します。主に染色体異常を指標とした生物学的線量評価や放射線の生物影響に関する研究を行っています。弘前大学は被ばく医療に関する研究・教育を行っている数少ない大学の一つです。私のこれまでの経験を生かして、微力ながら、本学の研究・教育の充実のために精一杯努力したいと思います。



COI研究推進機構

助教 岩根 拓朗

令和3年1月にCOI研究推進機構の助教として着任させて頂きました。専門はComputer Scienceです。

弘前市出身で、大好きな弘前の為に働けることを大変嬉しく思っています。

本機構では、青森県の短命県返上をスローガンに様々な取り組みを行っておりますが、私の担当であるデータベース構築、産学連携業務を中心に弘前COIの活動が地域の健康づくりや弘前大学の活性化と結びつくように日々精進していく所存です。

## 令和2年度弘前大学学生表彰を実施



研究活動や社会活動、課外活動等で活躍した学生及び学生団体を表彰する学生表彰表彰式を令和3年3月5日（金）に大学会館3階大集会室において行い、社会活動で活躍した1団体、研究活動で活躍した学生15名を表彰しました。

表彰式では、受賞者が所属する学部・研究科の学部長・研究科長及び指導教員が出席される中、福田学長から、受賞者一人ひとりに表彰状と記念品が贈呈されました。

福田学長からは、学生の功績を讃え、今後のさらなる活躍を期待して、「今回の表彰を、熱心に指導いただいた先生方、苦楽を共にした仲間と一緒に、大いに喜び、そして、誇りにしていただきたいと思います。表彰対象となりました社会活動は、地方創生、社会貢献に資する取組として高い評価を受けたものであります。そして、研究活動は、学会発表や学術論文として世界に発信されたものであり、本学で学ぶ学生諸君への大きな励みとなるものでしょう。そして、みなさんの今回の活動は、弘前大学の足跡としても記録されるものであり、大学としても心から感謝の意を表したいと思います。もちろん、これで皆さんの社会活動あるいは研究活動が終わるわけではありません。残された大学生活の中で、あるいは卒業後の新天地において、次なる高い目標を定め、さらに研鑽を積まれますことを期待します」との言葉が送られました。

受賞者を代表して、「フードバンクひろだい」代表の人文社会科学部4年 阿部航平さんが、「私たちの活動が評価され、こうして表彰されるに至ったのは、ひとえに福田学長をはじめとする多くの大学関係者のおかげです。この場をお借りして、感謝申し上げます。また、私たち弘前大学の学生が、非常に恵まれた環境に身を置かせていただいていることを実感するとともに、弘前大学の名に恥じぬよう、たゆまぬ努力を続けていかなければならない、と身が引き締まる思いです。今後も、弘前大学の学生であるという誇りと自覚を胸に、各々の道で、さらなる活躍を目指し、一心に努めて参ります」との謝辞を述べました。

## 【団体】

- 社会活動で特に顕著な功績があった団体  
フードバンクひろだい

## 【個人】

- 研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生

教育学部学校教育教員養成課程4年	千 葉 咲 楽
医学部医学科4年	福 士 咲 恵
医学部医学科4年	堀 野 友 里
医学部保健学科4年	荒 木 真 子
医学部保健学科4年	小早川 卓 也
医学部保健学科4年	宮 崎 舞 咲
理工学研究科博士前期課程2年	瀧 澤 奎 太
理工学研究科博士前期課程2年	稲 川 正 浩
理工学研究科博士前期課程2年	INOVASITA ALIFDINI
理工学研究科博士後期課程3年	趙 強
理工学研究科博士後期課程3年	安 萍
理工学研究科博士後期課程3年	王 佩 芬
理工学研究科博士後期課程3年	岳 喜 岩
理工学研究科博士後期課程3年	趙 忠 凱
理工学研究科博士後期課程2年	AISIKAE ANNWAER

2020年度最後の学園だよりVol.200「卒業・修了・退職にあたって」をお届けしました。

本誌を眺めてみますと、「コロナ・COVID」の文字が多く見受けられます。特に本年度は学生や大学職員、すべての方々が「コロナ」の対応に追われた1年でした。新入生の方は希望を胸に新生活をスタートさせようとした矢先に、いつまで続くかわからない「自宅待機」でのオンライン授業。特に弘前が新天地であった方々にとっては友人、知人もいない中で、精神的にもさぞ苦しかったのではないかとお察しします。大学教員や事務の方々においても、これまでのノーマルが通じず、「ニューノーマル」に

## 編集後記

柔軟に、かつ早急に対応しなければいけませんでした。私自身も慣れない「オンライン授業」の準備や対応に忙殺されました。この編集後記を書いている時点での世界のコロナ感染者数は1億人を超え、死者数は約240万となっています。日本の感染者数は約40万人、死者数は約6,500人となっており、欧米諸国に比べ2桁ほど低く抑えられています。新年度には、世界的にコロナが収束し、すべての人がオンラインではなく、実際に笑顔で会えることを祈りつつ、編集後記とさせていただきます。

(医学研究科 丹治)

# 弘前大学生協 「学生委員会」

## 【学生委員会とは】

学生委員会は理事会の下部組織となり、「理事会」で決定した方針を具体化するとともに自らが組合員の一人として学生が集まり、自ら悩みや不安を解消し、魅力ある大学生活を実現するために「たすけあい」「学びあい」「コミュニティづくり」の取り組みを実践しています。



(左)2019年集合写真 (右)2020年新入生の学生委員会 在席は100名



新入生WelcomeParty



StartUpSeminar



花壇活動



割箸・弁当容器回収



募金活動



自転車点検



みんなDEごはん

生協の「新入生企画」「お店作り」「総代サポート」や「大学生の健康と安全」「食」についての呼びかけ、「環境活動」など幅広く行っています。どれも大学生活を送る上で関りがあり、気づき考えて欲しいことです。そのきっかけ作りを学生委員会は行っています。

私が学生委員会に所属した理由は、就活や将来的に役立つ経験ができるのではないかと考えたためです。大学構内では「いろんな企画をしている人たち」と認知されているでしょうが、敢えて言葉にすると、その企画を1から作っています。そのため私自身も協調性を身に着けることや、チーム内での自分の役割意識を持って活動するといった経験ができました。目的意識があるとはいえこれを続けられるのはメンバーの支え合いのおかげです。ありがとう！

生協学生委員会 理工学部3年 藤田翔





弘前大学  
 学園だより

vol.200 / 2021年3月発行 題 字：福田眞作 学長  
編 集：国立大学法人弘前大学「学園だより」編集委員会  
委員長：増山 篤（教育委員会）  
委 員：大倉 邦夫（人文社会科学部） 吉川 和宏（教育学部）  
丹治 邦和（医学研究科） 阿部由紀子（保健学研究科）  
小豆畑 敬（理工学研究科） 曾我部 篤（農学生命科学部）  
工藤 政史（学生課） 成田 知子（学生課）  
印 刷：コロニー印刷

弘前大学

トップページ▶弘前大学について▶広報▶刊行物・広報誌▶学園だより  
バックナンバーをご覧ください。

学園だよりに関するご意見がございましたら、下記のアドレスまでお寄せ願います。  
弘前大学学務部学生課 e-mail: [jm3113@hirosaki-u.ac.jp](mailto:jm3113@hirosaki-u.ac.jp)

